
魔法先生ネギま！ ～天使で死神な物語～

赤原 鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～天使で死神な物語～

【Nコード】

N8381Q

【作者名】

赤原 鴉

【あらすじ】

天使になる筈だった人間。

しかし天使になれずそのまま人間に転生した人間は都市伝説「スクエア」を行い、死に至る。

青春時代真っ只中に死んでしまった彼は、天使と名乗る人物達によって「ネギま！」の世界で第二の生活を送る事となる。

その際、天使に転生し死神となった彼の名は「水無 裕介」。

これは【天使で死神な】彼の第二の人生を綴った、一つの変わっ

た物語である。

この作品は「魔法先生ネギま！」転生者の奇妙な物語」とリンクした形で進めています。さほど大きくリンクしてないので片方だけでも読めますが、出来れば両方読んで下さい。ちなみに作者が違います。

第1話「種族・天使 職業・死神」（前書き）

2 / 1 2 最初の投稿で不具合が生じ、最後の部分が抜け落ちて
おりました。訂正完了しております。
すいませんでした。

第1話「種族・天使 職業・死神」

「なんやあかなあ」

薄暗い木々の中。

一人の少女が、夜の森に立っている。

「ウチの気配で逃げてもうたか」

彼女の目線は地面に向いている。

地面には彼女の手前では深く、彼女から離れていくにつれて浅くなっている穴がある。

その穴はまるで、巨人が地面を蹴って歩いた跡のようだ。

「でもウチから逃げれると思わんことやな」

森の中には誰も居ない。少なくとも、彼女の周りには誰も居ない。彼女は地面から目線を逸らし、顔を上げる。それにつられてオレンジ色の髪も揺れる

虚空を見つめる凜々しい瞳は、青く澄んだ色をしている。

木と葉で侵食された狭い空から射す月光は、まるで青白いスポットライトを当てたが如く彼女の姿をしっかりと照らす。

暗くてもしっかりと見える白いマントは足元まで延びており、中の服は見えない。

マントには柄はなく、変わっている部分は肩甲骨の辺りに八の字で空いている長方形の穴だけ。

彼女はマントから右腕を出して前にかざす。

刹那、赤い燐光と共に緋色と橙色の二色で彩られた【武器】が現れる。

彼女はその武器の緋橙の棒を肩に乗せ、微笑を浮かべる。

その笑みには誰もが好印象を受けるだろう。

しかし彼女が肩に担ぐ武器のお陰か、その笑みには獷猛さが見え隠れしているように思えてくる。

「ほないくか」

木々がざわめく。

この時期の冷える風が、彼女の服と、肩まで伸びた髪を揺るがす。それに呼応するように、彼女の背中から白く大きな翼が生まれる。一つ一つが雪のように純白で、例えるならそう。

その翼は、天使のそれと考える程に美しい。

彼女は翼を一度動かして空気を打つ。その力強さに突風が起き、木々の葉を巻き込んで吹き荒れる。

そして彼女はその翼で木々に覆われた空から、月光が果てまで薄く照らす空へと飛んでいった。

肩に緋橙の【大鎌】を背負って。

「はい今日もやってきました【ムキツ 男だらけな禁断の猥談大会】

！ 司会はこの森田と」

「主に拳を使ったツッコミ役の倉田の二人でお送りしたいと思います」

イエーイと言って跳ねている森田に、その鳩尾みぞおちに一撃を入れている倉田。

二人はあれで結構仲が良く、今みたいに何も無い時でもああやって二人で場を盛り上げている。終わった後は森田の身体に打撃痕が複数見られる時はそうザラじゃないが。

俺こと【水無 裕介】は二人とよくつるんでいる内の一人だ。

俺達は同じ学校同じ学年で、成績は悪いが騒ぎは起こす事で先生方からは【悪ガツキーズ】として名を馳せている。悪ガツキーズの名付け親は先生達ではなく、メンバーである五人の中で特に騒がし

いあの二人だ。

「おっ！ 今日のは随分とそそるネーミングの大会だな」

そう言って身を乗り出したのは、五人の中で一番の変態である岡村だ。

コイツはとにかくまあ話を萌えだとかエロだとかの話に繋げる奴で、しかもその事に関しての情熱がこれまたまあ半端が無い。

一度コイツと二人で話した時は会話の大半がそっち系に持っていられるので話したい話題が前に進まなかった。なまじ大した話でもないので話を戻しにくいし、たとえ戻したとしても十分後にはまたそっち系に話がずれていく。

結果、コイツとまともな話をしようとするのが愚かな行動と悟った時にはサンサンと照りつける陽光は最後の力を振り絞って真っ赤に燃えている所だった。

「僕的には【猥談】の意味を知っているのかを問いたい所だけどね。君はどう思う？ 裕介」

「俺は知っているに一票だな」

そしてその清き一票は無駄にはならないだろう。

何故かって？ 教えたのが俺だからさ。

そして俺にこの一票を入れさせた人物は相田という。皆からの愛称は【八カセ】だ。

コイツは授業を受けていればそれなりに勉強は出来るが、八カセって言うほどの勉強家じゃない。

しかし俺達五人の中では一番頭がいいのでそう呼ばれている。

俺たちにつるんでいるが故に成績が悪いという奴ではあるが、別段騒がしい奴ではない。そういう点では俺も同じなんだが、コイツは性格がいい。五人の中で一番モテる。

男としては少し憎らしいが、男女先輩後輩に関わらず人受けがいい。モテる事で弄られたりはするが、いじめられる事は無いようだ。ざっとメンバーに関して説明したので、俺の事も少し語ろう。誰に言っているのかという質問は受け付けないのでそのつもりで。

俺は水無 裕介。それはさっき言ったか。

家に近い高校に受験して、高くも無く低くも無く何の特徴も無い高校に受かった俺は、時の流れに身を任せて現在二年生だ。

その過程でどんな事をしたのかは自分でも皆目見当も付かないが、気付いたらこの集団の一員となっており、現時点ではこいつらの馬鹿騒ぎを見て暇を潰すのが俺の学校での趣味になっている。

成績が悪いとは言ったが赤点欠点を付けられる程ではない。俺は高校を卒業できればそれでいいので、最底辺でも卒業できるのなら俺はそれに文句は無い。

この五人の中で赤点や欠点を保持していないのはハカセと俺ぐらいなもんだ。さっきの三人は少なからず付いているだろうな。馬鹿だから。

勉強が出来るわけでもなく、かといって友好的な人物ではない俺だが、唯一のアドバンテージとして親の力がある。親のスネかじりと言うのはいいが、グープンするるのでそのところヨロシク。

うちの親は大手の製薬会社の社長で、街の薬局から一代で大手に上り詰めた恐るべき手腕を持った人物だ。滅多に会えないが、その反動で親バカな面を持っている。

母は先に亡くしているので既にいない。

その収入の大きさは俺の生活に影響を及ぼしそうなものだが、贅沢をして大げさな生活を送るより普通の生活を好んだ俺は、現在一人暮らしで高校に通っている。

学費とその他諸々の経費は親が払ってはいるが、普通のマンションに住んでいる俺は父親から振り込まれている多額の【お小遣い】にはあまり手を出さず、いたって普通の生活をしている。勿論、普通に使う限りでは確実に余るお小遣いは貯金にまわされている。

後々は父の会社を継ぐのかもしれないが、そんな事はあまり考えていない。一応バイトはしているので他でも働ける様にはしている。

まあ俺の事はこんなものだ。

ちなみに俺がこうして端から見たらボーっとしている間にもハカ

セを抜いた三人は何かの話で盛り上がっている。

「そう言えば都市伝説って知っているかい？」

あの三人を微笑ましいといった笑顔で見ていたハカセは、急にこつちに話題を持ち出してきた。

「都市伝説？ 名前は聞いた事はあるが、あまり詳しくは無いな」

「僕もあまり詳しくは無いんだけどね、友達が一つだけ教えてくれたんだ」

「どんな？ と言っ先を促す。

ハカセは少しズレた眼鏡を中指で押し上げながら話を進める。

「スクエアって言って、電気を消した真っ暗の部屋で四隅に人を置く。その人達が直線状にいる他の人に部屋の壁をなぞる様にして順番に肩を叩いていく。そうやって叩いていくと四人目はどうなるか分かる？」

聞かれたのでその構図を頭の中に描く。仮に時計回りに一人ずつ回るとして、一人目が直線状の人に肩を叩くと、その人が次の人に向かつて肩を叩きに行く。

そうやって順番に叩いていくと、四人目は……。

「壁に突き当たる、だな。四人目は一人目が最初にいた場所に向かったとしても、一人目は直線状にいる二人目の場所に移動している。だから四人目が移動する直線状には誰も居ないので壁に突き当たる。どうだ？」

「正解。その通りだよ」

と言っ軽く拍手を送ってくる。

しかし、

「でもそれだけなら都市伝説なんて仰々しい名前なんて付かないよね。実はこの話には少し変わった結末が用意されているんだ。それは四人目がいない筈の肩を叩いてしまうという、ね」

「だろうな、案外予想のつく結末だ。」

「で？ お前はそれをしてみたいと言っのか？」

「こ名答。乗っってくれるかい？」

やっぱりな。コイツはこういう不思議系な物が好きな奴だ。

まあここは父親から借りている別荘だ。時間も夜だし、やってみるか。あいつらを焚きつけるのが少し面倒だが、暇つぶしにはちょうどいい。

ちなみに今は土曜日の夜だ。

そうして三人を焚きつけた後、怖い物や話が嫌いな岡村は外で待っている事になり、俺達はその準備を始めた。

ちなみに公正なじゃんけんの結果、俺が四人目になってしまった。まあいいだろう。たまにはこういう役柄も悪くない。

俺のその安直な考えは、後に取り返しが付かない事を招く事になる。

どういう事だ。

俺は今、猛烈に混乱している。現状把握に思考回路が焼き切れると思えて来るほどだ。

その悩みの種は目の前にある異形の者にある。

俺が手を置いているのは人の肩。そして先には可愛らしい少女の顔がある。

肩まで伸びたオレンジの髪の毛は、燐光を纏っているかの如く暗闇に映える。

振り向いている顔には、青く澄んだ大きな瞳が大きく見開かれ、まるで有り得ない物を見たかのような表情を浮かべていた。

彼女はどこから入ってきたのか。そして彼女は誰なのか。

これだけでも激しく疑問だが、問題なのは彼女の背中だ。背中の肩甲骨の辺りから、あるうことか【翼】が生えているのだ。その翼の羽はまるで純白のレースのようで、思わず見とれてしま

う。

しかし俺の目を奪っているのはそれだけじゃない。

彼女の左肩に肩を置いているが、反対の右肩には緋色と橙色の鎌が乗せられていた。

それはまるで死神が魂を刈る為の大鎌だった。

「あんた誰や？」

関西弁。標準語とはイントネーションが違うのですぐに分かった。

「っていつかなんでウチに触れとるんや？」

「……え？ 触れている？」

その質問では、まるで普通なら触れないという事なのだろうか。

ありえない話じゃない。

どこからとも無く現れた少女。顔は可愛いが髪の毛はオレンジ色。目は黒ではなく青。

全身を覆う白いマント。肩甲骨あたりであろう場所から生えている大きな翼。

極めつけは金属である事を照明するかのごとく、光沢を光らせる緋橙色の大鎌ときた。

そして自分がつい先程まで行っていたのは、都市伝説といわれる遊びのようなもの。そこには本来いない筈の五人目がいて、肩を叩いてしまうという。

「（そうか、まさか五人目が天使だったとは）」
そう、天使。

目の前の少女は天使に思える。その所以は間違いなくその背中に
ついている翼だ。

「（しかし天使様って言うには少し違和感があるな）」
視点を移動させる。その先には相変わらず大きな鎌。

これは天使にはどうにも似合わない。

それに天使によく付いている頭の上の輪も見当たらない。

翼の印象が大きすぎて天使と形容したが、これでは中途半端だ。

「……で？ アンタはいつまでウチの肩に手え置いとくつもりや？」
目の前の関西弁の少女は、可愛らしい顔を不機嫌そうに歪めて俺の手を肩から払う。

俺はそのまま素直に手を自分の太ももの横に下ろした。

「えっと、アンタは何なんだ？」

のっけから失礼な質問だ、と我ながら思う。

だが状況が状況だ。

出来ればにつこり笑って「ドツキリ大成功！」みたいな看板を掲げてほしいが、この雰囲気ではそれもなさそうだ。

彼女はこちらを向く。その瞬間にあの大きな鎌はいつの間にか姿を消しており、鎌を持っていたであろう腕もマントの中に隠れている。

「そんなん、こっちの台詞やんか。なんでアンタみたいなもんがこの【道】におんねん」

「道？」

「そうや、ここは【死神】達が天界に帰還する為にある道や。同業者である死神しか入る事も見る事も出来ひん筈やのに」

死神？ 天界？

もう何がなんだか訳がわからなくなってきた。

「ちよい待つとき。上と相談するわ」

出来れば今出た単語の意味を教えてほしいが、その要求は言う前に彼女に目を、いや身体を背けられた。

その状態で数分後。

急にこちらに向き直った彼女の表情は、さっきのものより深刻さが増していた。

「ちよい来てもらうで。ウチの上司がお呼びや」

「……行くつてまさか」

俺は人差し指を上を差す。

おれの言いたい事を読み取った彼女は、軽く頷く。

「ほな行くで」

「……ん、んなアホな」

俺の口から、普段滅多に使わない関西弁が出てきてしまった。

部下からとんでもない報告があった。

何の変哲も無い様に見える人間の少年が、天使である死神に接触された。

過去にこの事例の報告は数件しかない。

前代未聞、と言う訳ではないが、この件は果てしなくとんでもない事だ。

天使と言うのは、選ばれた人間が死後に魂が天界で転生を行った人物の事である。

人間の魂は死後にある条件を満たせば天界によって天使となれる。条件を満たさなければ、その魂は人間界じこくに帰り全く別の人間として転生を果たす。

つまり天使は、元々人間の魂によって出来ている。

そしてその天使が就く一つの仕事として存在するのが、【死神】という仕事だ。

この仕事は人間界に降り立ち、人間の魂を輪廻転生の輪に戻したり、人間の魂を喰らう存在から魂を守ったり、青春時代を送りきれなかった成熟前の魂を死後の世界の学校に送ったりと様々である。

しかし死神は人間には見えない。なぜ見えないのかはハッキリしていないのだが、とにかく見えないのだ。

しかし過去に数件天使が人間に接触した、いや接触されたという事例が拳がっている。

その人物は既に天使に転生しても充分なほどに条件を満たしているにも拘らず、転生の必要が無いのに輪廻転生の輪に混ざってしまった。

これが何を意味するのかは唯一つ。

天使側の、ミスである。

そのミスでその人物は大抵早い時期に天使と接触してしまう。

そしてそのまま死んでしまうのだ。人間界から肉体も消えて。

つまるところ今回の事例として天使と接触してしまった彼は、肉体を所持したままの状態で魂は死んでしまった。と言う事になる。

そしてそのまま天界に留まり、元の人間界に戻れなくなってしまう。

そして今のところこの事例を解決する方法は、たった一つだけ。

それで彼には納得してもらわなければならない。

部下の報告に気を重くする上司は、いつの間にもやられたため息をついていた。

「なんだよそれ……」

天使だか死神だか怪しくなってきた彼女に連れられ、瞬間移動のように景色を一変し、たどり着いた先は部屋だった。

清潔感があふれ出す、お洒落な執務室のようなイメージを受ける。

いや、実際に執務室なんか見た事もないがニュースで見る知事の
仕事部屋を白くした感じの部屋だったのだ。漫画や小説でも似たよ
うな描写を見たことがある。

そしてそこには天使がいた。それは本当に天使のような人物だっ
た。

スツとした顔立ちをして目は青く細く、髪は金髪を腰まで伸ばし、
レディーススーツを着込んでいる彼女のスタイルは抜群に良かった。
鎌は持つておらず、例え持つていたとしても天使と断言できそうだ。
テレビや雑誌でしか見れないような美人がそこにはいた。勿論、
背中には翼が生えていたが。

最初は綺麗な人だなと思った。しかし今はそんな事を考えている
余裕は無い。

彼女からは驚愕な事実を突きつけられたのだから。

「俺が……、死んだって？」

彼女の話によると、俺は既に死んでしまっているらしい。

いつ死んだかは全く自覚は無いが、さっきの鎌を持った女の子の
肩を叩いた時には既に死んでいたらしい。

しかも俺が死んだ原因は、突き詰めると彼女等天使の不手際。

正直、信じられない事が目の前で起きすぎて何をどう反応すれば
いいのか分からない。

怒ればいいのか、泣けばいいのか、笑えばいいのか。

今の俺にはそれすら分からない。

だから話を聞く。質問があれば問いたです。

「じゃないと俺は一向にどうすればいいのか決まらない。

「はい……。申し訳ありません」

「いや、もう散々謝ってくれたからそれはいい。それより俺はどう
したらいい？」

もはや初対面で年上にも拘らず敬語ですらない。敬語にする余裕
も無くなっていた。

頭の中は今の状況を理解しかねているし、感情はゆらゆら揺れて

釈然としない。

それでも最初に思い浮かんだのは、どうしたら皆の元に戻れるのかだった。

「恐らく、元の世界には」

しかしその浮かんだ事さえも破壊する天使達。

「そこでこちらの処置として、あなたには、あなたが居た元の世界とは違う世界に移り住んで頂くのかなと思ってます。」

俺が居た世界とは違う世界に移り住む？

言葉は理解出来ても、意味が分からなかった。

どうやら彼女が言いたいのはこういう事らしい。

俺が死んだのは、取り合えず突き止めると彼女達天使のせい。

前の俺の魂は既に天使になってる筈だったのに、あちらさんのミスで俺の身体に俺の前の魂が入ってしまった。

しかし俺の魂は既に天使足りえる魂なので、天使に触れてしまった。

その時点で俺は死んでしまっている。俺が天界に居るのがその証拠らしい。

俺はまだ青春時代真っ盛り。

元の世界に送り戻したいのはあちら側も同じらしいが、俺は既に死んでしまっている身。このままではどうやっても戻ることは出来ない。

そこで、天界てんがいで天使に転生して、唯一世界を行き来する事が出来る【死神】という職業に就き、元の世界は無理なので違う世界で第二の生活を送ってほしいという事だ。

「どうやっても、皆の元には帰れないんですか？」

あるいは、分かりきった質問。既に何回も答えを聞いて、それを俺も知っている。

それでも質問せざるを得ない。

「はい。残念ながら」

そう言いながらこちらに再度頭を下げる。

彼女達も悪気があってこんな事をした訳じゃない。そんな事は分かっている。

しかしそれでも、やっぱり皆の元に返りたい。

これは、我俣なんだろうか。今の頭の状況ではその判断もつかなかった。

結局、二時間ぐらい粘って訴えてみたが、全ては徒勞に終わった。

彼女等の案に乗る事にした。

いや、乗るしかなかった。の間違いだ。

この世界、この状況で俺は右も左も分からない。

未練たらたらだが、やっぱり違う世界に行く事にした。

今はその為の準備中。

まず俺は天使に転生する為に違う部屋に移された。

廊下ですれ違う天使達は、彼女を見ると羽で移動していたのに地上に着き、頭を下げていく。

結構偉い人だったみたいだ。

そこで俺は、結果的には天使に転生を果たした。

しかしそこで問題発生。

俺の容姿が変わっている。

校則である程度の短さを保っていた髪の毛は、腰まで伸びたサラサラヘアの長髪に変わっていた。

瞳は色が青色に。これは天使の人は皆そうらしい。

元々俺の顔つきは、中性的な感じだったのが災いした。

今の姿では、一見女性にも見える男性だ。

髪の長さや眼の色が変わるだけで、こつも印象が変わるとは思いもよらなかった。

しかも肌の色が少し白くなっている。

これは彼女達でも分からない不具合らしい。元々俺の存在がイレギュラーなせいだ。

この事に文句を言い続けて数十分。結局何も聞いてもらえず、次の用意へ。

ここにきてから俺の発言はほとんど通らない。

アウェイ感100%だ。

次に死神の役職の準備。といつても最低限の事だけだが。

そこでは死神の白マントと、黒白の大鎌を貰った。

これが死神の標準装備らしい。

そこで鎌の使い方や色々教えてもらって、最後に鎌をリストタイプのシルバーアクセサリーに変えて持ち運びを便利にする。

次は違う世界の準備。

向こうでの仕事は彼女たちが受け持つらしい。何故学生じゃないのかを問いただすと、過去に色々あったらしく、それらしい学生はやめているとか。俺の事は既に責任者に話は通っている。

取り合えずその為に今来ている学生服をスーツに着替える事になった。勿論別室で。

そこで気付いたのだが、鎖骨のちよつと下のところに小さな黒い宝石が埋まっていた。聞く所によるとこれは守護石といって天使がたまに持つとされる石だ。人間には見えないらしいが。

それと向こうの世界で一応少しの間だけさっきの関西弁の天使がガイドとしてついてくれるらしい。

お金は、俺の貯金と所持金があるから大丈夫。と言っていた。まあ財布は持つてるし、通帳も渡してくれたから、これで金には困らない。

死んでから父親に感謝する事になるとは思いもよらなかった。

父さん、ありがとう。

そんなこんなで準備が終わり、とうとう別世界に行く事になった。正直怖い。でも横に関西弁の天使が居るからまだマシだった。

不安の種は、仕事先の責任者に嫌われないか、だ。

もしそこで何かやらかしたら一気に大変な事になる。気をつけな
いと。

そうこうしている内に目の前の扉が開かれる。光が差し込んです
つごく眩しい。

「ほないくで〜」

そう言って手を引かれて、開かれた扉に飛び込む。

これからは、大変だ。

父さん母さん。

早死の息子は、色々な事に戸惑っています。

行き先が不安で眼が霞みます。

第1話「種族・天使 職業・死神」（後書き）

こんにちは。初めまして。赤原 鴉の一人、赤原獵犬です。ここでは赤原と名乗ります。

まず最初に、読了ありがとうございます。相方の鴉さんと【ネギま!】の二次創作作品を作るに当たって本当に色々ありました。ちょっとその話をさせていただきます。

そもそも私、赤原は鴉さんとはリア友なんです。だから作品は違えど同アカウントでの投稿が叶ったわけですが、本来この話は紆余曲折の果てに挙がりました。

まず私のアカウントである赤原獵犬（旧名：FUJIKAWA）ですが、本来鴉さんとは別の友達と一緒に作品として投稿する事になっておりました。

それに応じた形で、鴉さんも私とは違う友達と作品は違えたまま同アカウントで投稿する話が進んでました。

お互い話を重ねて、たどたどしくも設定や話を書いてました。鴉さん達の方も同じだった用に思えます。

しかし私の方でこの話が白紙になります。相方とのトラブルや色々あつて皆様には迷惑を掛けたと思います。あまり私の作品を見ていた人はいませんが、少なからず居てくれたのです。

そしてまもなく鴉さんの話も白紙に返ってしまいます。理由はあまり詳しくは聞いてないので、もしかしたら鴉さんの作品で明かされるかもしれませんが、私はあまり知りません。

その時、私は元々筆休め程度にこの作品を書く事になっていました。

鴉さんは「ネギま!」の二次創作作品を書いていたのですが、話が白紙になってしまったのでやめようかと思っただけです。

そこで私が一緒に投稿しようと言う事を持ちかけて、そこで私と鴉さんが一緒に投稿する事になったのです。

それまでも貰っていたのですが、鴉さんに本格的に助言を貰って当初ノリで適当に作った設定が結構しつかりして来た事と、書き方が筆休めの域を超えてきたので、今では案外真剣に書いてます（笑）。

まあそんな感じでこの作品が出来上がったわけですが、まだ「ネギま！」の世界には触れてません。まあ一話目はまだこんな感じで次からは「ネギま！」の世界での話ですので。

ちなみに最後の「父さん母さん」の件は、元は【竜華零】さんからの影響です。

元々この作品の発端は、竜華零さんの影響を受けて作り始めたものですから。

これ実は事後承諾なので、竜華零さんから苦情が来た際にはこの文を削除いたします。もし許可していただけたら、このまま続けようかなと思います。この件、個人的には結構気に入ってますので。

最後に、私の本アカウントである赤原獵犬で投稿連載中の作品、【魔女と魂の願い旅】もよろしく願います。

あまり多くの人に見てもらえてないのか、感想が一つも来ない事に少しへこんでます。

催促しているつもりではないんですが、やはり感想はもらえると嬉しいですし、指摘してもらえると助かります。

自分では友達に見てもらっているのですが、見知らぬ皆様から見てどう写るかが正直一番気にかかります。

最後がなんだか宣伝になってしまいましたが、それだけ結構辛い状況なんです。未だに感想を貰った事が無いと言うのは結構辛いもんです。

この作品は一応本アカウントで投稿している作品の間にとってま

すので、不定期に投稿していきます。

それでもいいと寛大な人はどうかこのまま御贔屓にお願いします。

長くなりましたが、これで失礼します。

それでは。

第2話「天使で死神なカウンセラー」

「ここは？ 駅か？」

天界で関西弁の天使に手を引かれて入った扉の先は、どこかの駅だった。

そこそこ大きい駅なのか、改札口がたくさんある。

しかしほとんど人が居ない。大きい駅なのにシントと静まり返っている。

「大丈夫か？」

隣の天使が聞いてくる。

適当に返事を返しつつ、手を離す。恥ずかしいとかはないが、無意味に手を繋いでいる必要も無い。

「ここはどこなんだ？ 見たところ大きな駅があるが」

「ここは埼玉県麻帆良市鳥羽井1-1-2の埼京線の麻帆良学園中央駅って書いてあるわ」

彼女は白マントから出した手に握られているメモ帳のようなものを見ながら答える。

しかし埼玉か。俺には全く縁ゆかりが無いな。

色々多忙な生活を送っていた父さんなら来た事があるかも知れないが、ここは別世界。

まず俺の肉親が居るのかどうか怪しいものだ。

兎に角、ここが埼玉なのはいいだろう。不思議で仕方がないが、別世界の日本と言う事で解決しよう。何故埼玉なのかは考えても詮無き事だ。

「で？ 埼玉に着いたのはいいが、これからどうするんだ？」

「え〜つとな、ここから15分位いった所にある中学校で、カウンセラーの仕事についてもらう事になっとるな」

「は？ カウンセラー？」

なぜ？ 何故？ Why？

確かに俺はカウンセラーの仕事については少しばかり知っている。父親が淋しい時や悩んでいる時に傍に居れないからと言う理由で、中学生まではカウンセラーの女性と一緒に屋敷に住んでいた事がある。

その時にカウンセラーの事やカウンセリングのコツとかを聞いていた。

だからってそんなピンポイントな。

「なんでも、あんたがあのまま生きてたらカウンセラーの道に進んだってだからやって」

マジですか。あの人の影響は俺にとって案外大きかったらしい。

取り合えずその中学校に向かって歩く。

彼女に言われて白マントを着用しているので、端から見たら奇妙な二人組みだろうな。

首から下、足首まで伸びた無地のマントを来た二人組み。人が居ないのは僥倖だ。

しかしカウンセラーか。また面倒くさい道に進むつもりだったんだな。俺。

駅から直線的に歩いていくと、目的の中学校に着いた。しかしこれはまあ。

「随分と大きい中学校だな……」

目の前には今までに見た事の無いような大きさの中学校があった。正式名称は【麻帆良学園本校女子中等学校】。

察してもらえたと思うが、目の前の学校は女子校である。

「マジですか……」

隣の彼女に聞こえないようにぼそりと一人呟く。

カウンセラーはいいとしても、その場所が女子校ってそんなのアリかよ。

岡村がよくやっている18禁ゲームの展開の様なシチュエーションだな。

行き先に一抹以上の不安を感じながら中学校に入る。

しかしこれがまた広い。グラウンドを通っている訳でもないのに校舎までの距離が結構ある。

これだけグラウンドが大きいと自然と校舎も大きくなる。恐らく廊下も結構な長さを誇っているだろう。

そんな憂鬱な事を今考えても仕方ないので、俺は彼女と話をしながら歩く事にした。うん、今決めた。

「そついやあんたの名前は？」

よくよく考えると彼女の肩を叩いた事によって全てが始まったと言っても過言ではないのに、俺は彼女の名前を知らなかった。いや、まあ単に余裕が無かったただけだが。

しかし聞き様によっては白昼堂々とナンパしているようにも聞こえるなこの言葉。

「歌音^{かのん}やけど何？」

「いや、そついや名前知らないなと思ってさ。しかし珍しい名前だな。【しおん】はたまに聞くが、【かのん】は初めて聞いた」

「よつ言われるわ」

「そつか。俺の名前は水無 裕介。って既にしってるか」

「せやね。しつかし校舎まで遠いな。なあ裕介、飛行練習兼ねて入り口まで飛んでいこか？」

そう言った歌音の背中には既に羽が生えている。既に飛ぶ気満々なのは聞かなくても分かる。

いきなり名前で呼ばれた事もまあいいだろう。フレンドリーなのは悪い事じゃないし、嫌いじゃない。

だが問題が一つ二つある。

「人に見つかったらどうする。それに俺は翼の出し方すら分からない」

むしろあるのかすら疑わしい。

眼に見えている鎖骨近くの宝石の感触すらないのに、見えない翼の感触なんてあるはずもない。

大体どうやって出すんだ。あれか？ 出るとか言ったら出てくるのか？

ほれほれ出るぞ。出ないと目玉をほじくるぞ。

そうなんともふざけた軽い感じで考えていると、

バサッ！

お察し頂けただろうか。これは羽の羽ばたく音。そしてその羽ばたいた翼は俺の背中にある。

「マジですか!?!」

「なんや出せるやん。あ、ちなみに今のウチ達の姿は誰にも見えてへんからな」

それを聞いて一安心。しかしまさかこんな簡単に出るとはな。驚いた。

人に見られていたらどうしようかと思っただが、よく考えると見えない以前にそもそも周りに人が居なかつた。

ちなみに、その後この天使の翼ジャジャつまに振り回されたのは言うまでも無い。

空を飛んだり進んだりではできるが、速度調整と強弱がバラバラで視界がグルグル回って吐きそうになる。幾度か地面にぶつかった。

空を飛ぶのを禁止にしようかとも思っただが、やっぱり空を飛ぶという利便性や夢の様な体験には抗い難い。この事は今後の目標にする事にした。

幸い、天使となってから体の頑丈さは飛躍的に上がっていたので、

大きな怪我は無かった。

しかしこの音で誰も来ないなんてな。

「ほ、君が水無君か。待っておったぞ」

「……マジですか」

誰にも聞こえないようにそう呟く。

今目の前に居るのはこの学校の校長だ。

しかしこの校長、後頭部が異常なまでに長い。とにかく長い。おおよそ三頭分ぐらいある。

もはや人外な域に達している。

「どうかしたかの？」

「いえ、なんでも」

即答。出来れば追究しないで下さい。うっかり口と鎌が滑ってしまいそうです。

すると隣に居た歌音が前に出て、なにやら書類らしきものを校長に渡している。俺に関する資料だろうか。

「では、後はお願ひします」

「うむ。彼女にもよろしく伝えておいてくれい」

「了解しました」

そういつて歌音はこちらに振り返り、俺のほうに歩んできた。

さっきの歌音と校長との会話で、この先の言葉はおおよそ予測はついていた。

「それじゃあな裕介。これから頑張りや」

「おう、ありがとな。忙しいって聞いてたのに」

「ええって。ほなバイバイ」

そう言った彼女の髪は、女性特有のふわっとした香りがした。今まで気がつかなかった髪の香りを何故今気付いたのか。

答えは簡単。彼女の顔がかなり近くにあるからだ。

彼女は俺の左頬に軽くキスをした。だから顔が近くて、オレンジ色の髪のいい香りに気付く事が出来たのだ。

彼女が去った後、俺は暫く放心状態だったが、校長の一言で目覚める事になった。

「今年は青い春が来そうじゃのう」

「……茶化さないで下さい」

長い白髭を手櫛で梳いていた校長は、ほほっと少し笑った。

「じゃがお主は本当ならまだ高校生なのじゃろう？ ならあながち間違いないじゃろう、のう水無【先生】？」

校長は少し皮肉った言い方をした。

妖怪じみた後頭部の癖に。いつそ鎌で落としてやるうか。

内心でそんな事を思いながら、それをおくびにも見せない様にして話を進める事にした。

「それより、カウンセラーの仕事をしてくれませんか？」

「ほ、そうじゃったの。では少し長くなるが、説明をするぞい。

と言つてもわしはそのカウンセラーの事に関してあまり知識は無くての。そちらの方面はなんとも言えん。

とにかく自由にやってもらつて、何か学園に関する事があれば報告してもらおう。それを基本方針に仕事をしてもらおう事になりそうじゃ。

初めてじゃし、多少の失態は眼を瞑るが、カウンセラーの仕事は信頼が大事じゃと聞く。信頼を失くせばそれだけ仕事に影響してくるじゃろうからそれも気をつけるようにの。

それとこの後他の先生に会いにくのじゃが、一つだけ注意しなければならん事がある。それは天使の事を隠す事じゃ。これは教師に限らず、生徒にも同じじゃがの。

一応これで終わりじゃが、何か質問はあるかの？」

校長の長い長い説明を聞いていた俺は、一つの疑問が残った。

「あの、住む場所は用意してもらえますか？ えっと、ほら教職員の寮の様な」

そう俺が一番気にしていた事はこれだ。

歌音達天使が用意してくれるとは聞いていたが、案内される前に歌音はいなくなってしまった。

なので恐らく用意してくれると思っていたのだが、説明が無かった。

「そのことなんじゃが……」

「なにか問題が？」

「その、教職員の寮に空き部屋が無いんじゃないよ」

「は？」

一瞬何を言われたのか分からなかった。

寮の空き部屋が無い。

つまりそれって、

「寮には住めないって事、ですよね」

「まあ、そうなるの」

「マジですか！？」

ええ〜話が違っじゃねえか天使さん！

住む部屋も用意するって言ったよね！？

どうすんだよマジで。俺はこの土地勘なんてあるわけが無いし、部屋を借りる金は いや、それはあるか。見知らぬ土地での安全の為に置いておく算段の貯金が減っていくけど。

くそっ、まあホームレスよりはマシか。

この歳で既にホームレスなんて洒落にもならない。

「まあそう慌てるでない。わしは教職員寮に空き部屋がないと言っただけじゃぞ」

「？ それでは何か考えでもあるんですか？」

出来ればそうであってほしい。

でなければ俺は今から給料と貯金、収入と蓄えて支出の計算を暗

算でしなければならなくなるのだからな。

「うむ。考えによっては、カウンセラーの仕事に相応しい部屋じゃろっ」

「相応しい部屋？」

カウンセラー室？ それとも空き教室？

どちらにしても学校で寝泊りって事になる。

うーん、どうしよう。

学校で寝泊りするのは出来るなら避けたいし、でも貯金にダメージが及ぶのも頂けない。

っていつか俺の貯金は一体いくらなのか。

通帳が二つあるので詳しくは分らんが、俺のバイトで貯金した分はあまり多くない。

もう一つの父親からのお小遣い通帳も、あまり使っていないと思われてさほど入ってないと思う。

まあそれでも百万程の貯金はあるのだろうが、さすがにそれだけで生活は難しいだろう。

この近くに格安の物件でもあれば別だが。

「うむ、それはの、生徒寮の管理員室じゃよ」

「管理員室？」

「うむ、名案じゃろ？ カウンセラーと管理員を兼任する事によって生徒の身近にいられるのじゃ。信頼も得られるじゃろっし、気軽に話も出来る。仕事もさほど多くないし、初めてでも大丈夫じゃろっ」

まあそういうならいいかな？

部屋もあるし、仕事もさほど大変じゃないなら。

「はあ、まあそういう事ならそれで良いです」

「決まりじゃな。ではさっそく諸々の用意にかかるとするかの」

こうして俺はカウンセラーの先生として、ついでに生徒寮の管理員として、この学校に赴任する事になった。

父さん母さん。

息子はカウンセラーになりました。

不安でと言う露もやは、まだ晴れそつにありません。

第2話「天使で死神なカウンセラー」（後書き）

こんにちは。赤原です。

先にこの作品が出来上がってしまったので、先に載せます。

本当は赤原猟犬の方の作品を先に仕上げたかったのですが、文章を千切っては投げ千切っては投げの繰り返しで、お兄ちゃん生きている気がしません。（このネタ分かる人いるかな？）

頑張ってますが、いい感じに出来ない所以现在しばらくお待ちください。

それでは今日はこの辺で。

ついでに没ネタを置いておきます。さほど意味は無いのでスルーしても結構です。

ガチャ。

学園長「天界の使者か、待っておったぞ」

裕介「後頭部長っ!？」

歌音「ちよつと、失礼やで」

学園長「ほほ、構わん構わん。この学園の女の子はそれぐらい元気な者ばかりじゃ。お主らの様にの」

裕介「ら?」

学園長「そうじゃ、二人とも可愛い女子じゃろう」

裕介「俺は男だ、この妖怪後頭部じじい!」

学園長「ふ、ふおおおお!？」

第3話「そして学園の始まり」

彼が居なくなつてから5日が経つた。

水無 裕介が行方不明になつてから、僕達のメンバーはいつもの元気な五人組ではなくなつていた。いや、既に五人組ですらなくなつている。

「帰つてこないね、裕介」

「だな。ハカセはなんか分かつたか？」

「いや、調べているけどあまり有益な情報は見つからないよ」

森田の質問にそう答え、重い溜息を一つ吐いた。

僕たちは学校の屋上で座り込んでいる。学校で集まつて何かを話を時は大抵ここで話し込んでいた。

あの時密室になつた別荘の中で僕達がスクエアをしていた時、何も無かつたら裕介が電気を点ける手はずだったが一向に電気は灯らず、焦れた僕が電気を点けた時には既に裕介はいなくなつていた。

三番手の森田はきちんと裕介の肩を叩いて、尚且つ話もしていらしいので間違いないから消えている。

僕達は手分けして彼を探した。山の中に立っていた彼の父親の別荘の周りを。大声を張り上げて彼の名前を呼び、彼を探している内にまるでミイラ取りがミイラになるかの如く岡村が迷子になつていったが、兎に角そこまでも彼は見つからなかった。

翌日、僕達は別荘を離れて山を下り、警察に通報しに行った。

しかし警察には事情を説明しても受け入れて貰えず、その内帰つ

てくるだろうと追い返された。

彼の両親には話そうと思ったが、僕たち4人では連絡方法が分からない。

結果、彼の失踪の原因であるスクエアと言う都市伝説について調べた。

しかし如何せん元が信憑性の薄い伝説だ。体験談を見たりしていても、どうも胡散臭さを拭えない。

「ったく、一体何処をほつき歩いているんだか」

「お前も変わんねえだろ、岡村。探している内に迷子になって、半泣きで見つかったのは誰だよ」

「蒸し返すんじゃねえよ森田。青痣増やすぞコノヤロー」

「喧嘩売ってんのかお前」

「止めないか二人とも。気を荒くして仲違いをしている場合じゃないだろう」

急いで二人を止めに入る。この役は基本的に裕介の役目だった。

岡村と森田はハイテンションで騒ぎ好きだが、お互いに短気なのだ。こうやってぶつかる事もこれまでに多々あった。それを綺麗に収めて、あるいは煽って結局伸して物理的に鎮めるのが裕介だった。

実はこのメンバーの中で一番怖いのは裕介だ。何故ならそれは、みんなを口上手くまとめる事も、物理的に言う事を聞かせる事も出来るから。

その代わり、あまり口煩く小言を言ってくる人でもなかったし、基本的に迷惑をかける様な事をしなければ何も言わなかった。

裕介がもう少し正悪どちらかに偏っていれば、極端に言えばボランティア集団にもなっていたかもしれないし、不良にもなっていたかもしれない。

「つーかそもそも、お前がスクエアをしようなんて言わなければこんな事にはならなかったんじゃないか。お前が偉そうに言う資格はねえだろ」

「そんな事は分かってる。だからこそ、僕は僕なりに出来る事をし

ている。君達の仲違いを止めているのもその一環だ。今は裕介は居ない。彼が帰ってきた時に僕達がバラバラだったら、僕は彼に合わせる顔がない」

だから、僕もこうやって頑張るから。

早く帰ってきてくれ、裕介。

僕じゃこの役は、荷が勝ち過ぎだ。

「初めまして。水無様」

気がついたら変な所にいた。

一応室内なのは分かる。しかし内装が物凄く可愛い。可愛らしすぎて絵本の中に来たのかと思いきやそうになる。こんな感じをフアンシーって言うんだっけ？

「んで、君は誰だ？」

そんな室内の真ん中に、金髪の顔が怖い人形を抱いた少女が居た。いや、幼女だな。

「私は神です。見たら分かるでしょう」

見た目通りの可愛い言葉で、ぶっ飛んだ内容の言葉を聞いた。神？ ゴツド？

「取り合えず、この空間自体がもの凄く現実とかけ離れている事は分かった」

ていうかここ何処だよ。

真っ黒なボタンの瞳でこっちを直視してくる可愛いぬいぐるみだらけのこの部屋に、俺は早くも飽き飽きしてきた。俺の生涯にこんな量のぬいぐるみは要らない。恐らく一生分のぬいぐるみを視界に

捉えているだろう。

「んで、可愛い神様は俺に何の用かな」

「可愛いでしょ、この容姿。私も中々に気に入ってましてねえ」

随分と大人びた、一腹もってそうな政治家のような喋り方だった。

何故だろうか、目の前の少女を子ども扱いすると違う意味で激しく後悔しそうな予感がする。そりゃもうひしひしと。

しかしこの空間がおかしいといっても、目の前の少女をいきなり子供じゃないと割り切って大人な対応をするというのも色々どうよ、となるわけで。

結果扱いは変えない、いや、変えられないと結論が出てしまった。「まあ確かに可愛いけどね、ところでお嬢ちゃん。ここがどこだか分かる？」

「ははは、お嬢ちゃんと来ましたか。残念ですが私はあなたより遙かに年上ですよ。これでも、ね」
ウインクをして可愛い仕草を取っての年上宣言。なにこれ？

大人びた子供、と片付けるには何故か違うと感覚が告げている。というか、この子供にあつてから気持ちの悪い感じが俺の体を這い回っている。これ程嫌な感じしかない子供も初めてだ。そもそも子供かどうかも怪しいところだが。

「さてさて、私のカワイイ姿の話はここまでにして本題に入りましょうか。あなたは私の管轄じゃないのであまり長く滞在させられませんが」

なんとなく分かってきた。この子、いや目の前の人物は本当に神様なのかもしれない。にわかには信じがたいが、そう仮定すれば色々見当がつく。

この部屋は神様？ の部屋で、何かしらの理由で俺をここまで呼んだ。神様とあればそれくらいは出来るだろう。しかも俺は天使に会っているんだ。神様もいて不思議じゃない。いまいち分からないのは何故子供なのかぐらいだろう。

「君は、いや、あんたは本当に神様なのか？」

「いやですねえ、さつきからそう言ってるじゃないですか。可愛い神様はお嫌いですか？」

「いやそういう訳じゃないんだが、あんたからはなんと言うか、胡散臭い感じじゃないからな」

「中々直球で物を言う人ですねえ。そういう人は嫌いじゃないですよ」

そう言っただけ抱いていたぬいぐるみから片方の手を離して、人差し指を立てた。

指や体のパーツは可愛いのに、なんとも心は落ち着かない。

「さて、ここにあなたを呼んだのは他でもありません。実はあなたに話しておきたい事があるのですよ。それはある人物の事についてです」

「ある人物？」

神様は俺の相槌に、子供特有の可愛く少しふっくらした顔を縦に動かした。黙って座っていたらこのぬいぐるみだらけの部屋だったから分からなかったかもしれない。

本当に容姿だけは出鱈目に可愛い神様だった。

「その人物と言うのはあなたと少し似通った事情の持ち主としてね。簡単に言うとあなた達はこの世界での世界規模イレギュラーなんですよ」

成程確かに俺はこの世界の人間じゃない。世界規模のイレギュラーと言っただけ間違っていないな。

「世界規模……。それはその人が俺と同じ天使と言う意味ですか」「あなたは天使でもその人は転生者。あなたの肉体は世界規模のイレギュラーですが、その人はこの世界で生まれた肉体を持っていませんので、魂だけがイレギュラー。あなたは肉体が、彼は魂がイレギュラーという奇妙な関係になっているんですよ。これはあまり頂けない状況でしてねえ」

「具体的にはどういった事ですか？」

「片方のイレギュラー位なら私の力で封殺できていました。今までの彼が世界に及ぼす影響は皆無と言ってよかったですでしょう。しかしそこであなたがこの世界にやって来てしまった」

「俺がこの世界に悪影響を起こす、と？」

「その可能性は大いにあります。そもそもイレギュラーというのはその事後の事にも大きく影響してくるのですから、神である私がそのイレギュラーを広めない様にするのも当然といった事でしょう？」

いつの間にもやら世界規模の話になっているのに、神様は笑顔を一切崩さない。しかしその笑顔の奥の雰囲気は少しだけ固くなっていた。

「あなた以外にも肉体を持った天使と言うのは存在しました。天使たちの職業、死神の仕事管理倉にある一級書類にはあなたと同じ様に天使になった人が、いくつかの異能の力を持った天使として記されています。そのどれもが、天界では畏怖されるような能力でした。ある人物は私を殺そうとした事さえあります。実際に腕が片方吹き飛びましたっけね」

一瞬だけ、神様の雰囲気が変わった気がした。しかし依然顔には笑顔が張り付いているので、確信を持つまでには至らず、少しの逡巡を経て疑問を振り払った。

「その人は、どうなっただんですか？」

「それを聴くのはやめておいた方がいいでしょう。自分の結末の可能性を知る必要なんて、どこの誰にもありませんよ」

「ならあんたは、俺に何を伝えたいんだ？」

「簡単な事だけです。先ほど言ったようにあなたと似た様な境遇の人がいる。出来ればその人と仲良くしてほしいと言う訳ですよ」

「どんな人なんだ？」

神様の話を聞いて、少し興味が湧いた。

正直こつちの世界に来て心寂しい気持ちもあつたんだ。気兼ねなく、嘘をつく事無く話せる相手が欲しいと思っていた。

歌音が今一度来てくれまいかとも思ったが、彼女も何かと忙しい

のだろうし、そもそも俺から天界の天使に対しての連絡方法を知らないのだ。学園長なら何か知っていると思えば、方法を聞きにいったら「おいおいと、その内への。今は仕事に精を出してくれい」とはぐらかされた。無論、学園長では話相手には失礼ながら少し役不足だ。

「あなたは、ディオ・ブランドーという人物を知っていますか？」

ディオと聞いてあの【ジョジョ 奇妙な冒険】に出てくる悪のカリスマたるDIO様を思い出したのは正直自分でも意外だった。もう随分と前に読んだ作品なのに頭の中に残っていたみたいだ。

しかしさすがにそれは無いだろうと内心自分に突っ込んで、結局知らないと答えた。

小さな容姿の神様は驚愕な事実を突き付けられたかのように身振り手振りで驚きを示した。

「なんと！？ あの有名な【ジョジョの奇妙 冒険】に出てくる悪のカリスマたるDIO様を知らないとは！？」

あ、これビンゴだったわ。

「それなら知っている。あのマンガはとにかく異色だったよ」

「そうですね、それなら話が早い。ちなみに私の得意技はキング・クリムゾンです」

「マジですか！？」

さらっと自分が時に関係する力を持っている事をバラす神様。

「その転生者の容姿はそのディオ様に近く、そして名前はディオ・ブランドーですからすぐに分るでしょう。何せ私がそうしたのですから」

…… 成程、その人と話す時はこの神様の事は鉄板なのだろうな。色んな事を聞けそうだ。

「あなたが彼にどのような影響を及ぼして、私を楽しませてくれるのか。遠くから楽しみに見えていますよ。勿論、きちんとイレギュラーの拡散を抑える事も抜きなく」

「若干一部分が気になるが、取り敢えず了解した。会ってみよう」

流石に会って即刻だロードローラーだ！ は無いと思うけどが、用心しておいた方がいいだろう。何せ向こうはデイト様なのだから。「そうですか、それじゃあ正直もう眠たくなってきたんで強制的に送還しますね。それでは」

「そつちから急に呼んでおいてそれか」

その一言を言い終わった後、瞬間的に景色は変わり、俺はベッドの上で目覚めの時を迎えていた。

あの神様とご対面したのは、俺がこの世界で初めて眠った時の夢の中だった。つまり、俺はこの世界にきて2日目という事になる。

昨日は学園長との対話の後、先生方と顔合わせをした。俺は元々高校生なので全員が年上という事になると思っていた。実際、皆俺より年上だった。

その中に一人だけ、俺より年下の先生がいた。高校2年生である俺より7歳も下の、つまり10歳の先生がいたのだ。

なんでもその先生はイギリスの学校で飛び級をする程頭がよく、こつちに教育実習生という形で日本にやってきたらしい。

その事を話す口調も、自己紹介するのに使う日本語も、恥ずかしがらずに話す態度も、10歳とは到底思えなかった。唯一10歳と思えるところは身長ぐらいなものだった。多少話し方に子供っぽさもあつたが、それでも年を鑑みたら及第点を超えているのは誰から見ても必至というものだろう。

世界にはいろんな天才がいるものだと思った。しかし今は5歳児が小説で大きな賞を取る事もあるのだ。9歳で天才的なピアニスト

もいる。そう考えるとあり得ないとは言えないが、それでもとても信じがたい。

後、この子供先生【ネギ・スプリングフィールド】には、何か感じる場所がある。言葉で説明しにくいけど、なんだか見ていると目が疼くのだ。なんだか目が、何かを見せようとしているかの様に。

あれは一体、何なのだろうか。

「生徒諸君。今日から学年が一つ上がり、後日には新入生も入ってくる時期になった。この学園ではあまり心配はしとらんが、友と仲睦まじく中学生を送るようにな」

今日はこの学園の始業式。女生徒達がズラリと並んでいる光景を目にして、やっぱりここは女子校だったんだなあと思いきや、軽く溜め息をつく。

中学生とはいえ、女性と関わる事をあまりしてこなかった俺にしては、正直息が詰まる。せめて共学ならもっと心休まるのに。

「それでは、既に多数の生徒が気にしている人物の紹介といこうかの。水無先生、ここに」

「はい」

やべえ、滅茶苦茶緊張する。特にカウンセラーは印象をを大事にする仕事だ。第一印象は特に重要視される。ここでトチったら後に響くぞ。

なるべく平静を装い、軽く笑顔を浮かべながら、金属の軽いステージのタラップを上る。

「初めまして、今日からこの学校でカウンセラーとして働く事に

なりました、水無 裕介と言います。進路の悩み、交友の悩み、勉学の悩み、恋の悩み、献立の悩みまではさすがに請け負いかねますが、そういった悩みがあれば是非相談に来てください。火曜と木曜は医務室に、放課後であれば寮の管理員室にいますので気軽に來てください。これからよろしくお願いします」

そう言っ頭を下げる。

生徒たちからは感嘆めいた声と、拍手が飛び交った。声や拍手の大きさを見るとそれなりに好印象を持ってもらえた、と思う。全体的に見ればそれほど悪くないだろう。

実はドラマや漫画で見た先生の自己紹介シーンを弄っただけだったが、それなりに悪くはなかったようだ。

その後、始業式を終えて生徒たちの質問攻めが少し続いた。一番多かったのが「男なんですか？」という事実に対しシヨックを受けたが、今の俺の容姿は若干女っぽいのも事実。髪は長いわ、肌は白いわ、おまけに顔立ちが中性的。自分でさえ最初に女になったか心配するほどだったのだから無理もない。

こうして俺のカウンセラーとしての仕事が始まった。

今日は始業式だったので、午前中に生徒たちは学校を後にしている。俺の元にも早速話に来る生徒が来たのは素直に嬉しかった。ここでの仕事の第一歩としては幸先のいいスタートになった。

そうして生徒たちからの質問攻めも午後には落ち着き、寮に帰ろうとした時だった。

帰り道である人物の後ろ姿に目を奪われた。

流れるような金髪のヘア。後ろからでも分かるぐらいに鍛えられた肉体。そして耳の金というより黄色のリングのピアス。

俺はこの男を、知っているっ!!!

.....
~~~~~  
~~~~~

第3話「そして学園の始まり」（後書き）

こんにちは。赤原です。こちらと獵犬共々お久しぶりです。

ゴツドイーターの話が書き進まない……。どうしよう本当に。先にこつちが書き終わる。そもそもゴツドイーターへの熱が冷めていく事も原因かも。やり直そうかなあ？ GE。

それはそうと、この話でもロリ神様登場。出す気なんて最初は無かったのですが、気づいたら登場していました。今では鴉と赤原のマスコットの存在になっています。ストーリーを遅延させる能力を持っている厄介なマスコットですが、気づいたら登場していて、気づいたら暴走し始めています。ほんっと厄介。でも書いちゃう。

次の話からようやく主人公、Sが対面です。いやぁ楽しみです。しかしこの時点でお互いの戦闘力は全然違うんですね。裕介は未だ大鎌しか使えないのに、向こうは波紋、メタリカ、【世界】を使ってきます。勝ち目無いな、おい。

戦闘にならない事は分り切っていますが、出来ればディオ様には穏便に振り向いて欲しいですね。その拳動がどうなるのかは鴉さんに聞いてみないと分からないですが。

それでは今日はこれで。また次回もお願いします。

どうしよう、今回は見逃して、少し情報を集めてから声をかけようか？　だが、そもそも彼がこの学校に来た理由が俺にはまだ分からない。

彼がどの立場の人物か分からないんだ。

教材の会社の営業マンなのか、セキユリテイ関連の人なのか、教職員なのかすら分からない。そもそもこの学園内部の人間なのか、そうじゃないのかも分からない。

神様には悪いが、ここは見逃そう。今日はまだこの世界にきて二日目だ。急ぐ事もないだろう。

帰って話す人間がいないのは多少寂しいが、危険性を孕んでいるかもしれない人物に話しかけるよりはいいだろう。よく考えれば、寮につけば生徒からの質問攻めが再開されるかもしれない。今無理に話しかける必要性もないだろう。

話しかけない方向で決めた俺は、少し考えて学校周辺の道を探索する事にした。有り体に言えば時間つぶしだ。話しかけないと決めたので、彼との距離をあける事にした。

彼の姿は既に結構離れていた。考えが長すぎたのかもしれない。その時間を震えながら突っ立っていた事を思い出すと、多少恥ずかしい感情が込み上げてきたが、生徒がいないので良しとした。

さすがに気付いたらこんな道路で突っ立っている訳にもいかず、周囲探索の為に横道にそれようとして体を90度回転した。

何だ？

その時、何か言いよの無い違和感を感じた。
そして目の前には。

「えっ？」

さつきまで遠くにいたディオ・ブランドーが、太陽を背にして俺を見下ろしていた。

「やあ、初めまして水無先生」

「な、え、ええ？」

頭を90度回転させて、先程まで目の前の人物がいた場所を見る。そこには何も無い。当たり前だ。そこで見たものは既に俺の目の前に立っているのだから。

当たり前だが、明らかにおかしい。

まるで瞬間移動でもしたかの様に、そこには何も無く、目の前に急に現れた。

いや、違う。思い出した。

これはそんなチャチなものじゃない。

テレポーション
タイムストップ瞬間移動なんかじゃ、けしてない。これはもっと恐ろしい、
時間停止だ！

そう、彼の能力。いや、彼の持つ幽波紋スタンドの持つ能力、時間停止の力だ。

「どうした？ 水無先生」

「え、あつとその、ど、どちら様ですか？」

取り敢えず、会話しよう。こつちから話しかけるつもりは無かったが、話しかけられてしまったてはどうしようもない。怪しまれずにこの場から退却しよう。

「そうか、そういえば自己紹介をしていなかったな。私はディオ・ブランドーだ。よろしく」

「ええ、こちらこそ。私は水無裕介です。その麻帆良女子中学のカウンセラーをしています」

「ああ、知っている。何せ私は、その中学の教員だからな」

「え？ そうなんですか？」

ああ、と首肯を交えて返事を返される。

知らなかった。逆に、だから向こうは俺の事を知っていたのか。大方、校長先生に聞いたか、質問攻めの時に見られていたのだろう。返答に夢中で気付かなかった。

「随分と人気じゃあないか。生徒からの第一印象は好感触と言ったところか」

「ええ、おかげさまで。女生徒に殺到されるなんて初めての体験で驚きました」

「成程、役得だな。多少男かどうかが怪しい顔立ちだが」

「それは言わないで下さい」

やばいな。そろそろなにか対策を考えた方がいいのかもしれない。まず散髪にでも行って髪を短くするか。こうまで女と疑われるとは、やるせない。

「さて、私はそろそろ行くとする。また明日、学校で会おう」

そう言って、ディオ様はクールに去って行った。

「なんだ、話してみたらそれほど怖くなかったな」

口調は変わってないような気がしたが、それなりに気さくな人っぽい。

もしかしたら他の人に既に影響されているのかもしれない。それなりに色んな人と出会っているのかも。

だけどひとつ、疑問が残る。

「あの最初の時間停止。もしかして驚かす為だけに使ったのか？」
そう考えるともの凄くフレンドリーなディオ様だった。

「なんでだ……」

転生者のデイト様と別れた後、俺は散髪に行った。やはり女に見られるのは嫌だったからだ。女生徒からは長髪の方が親しみやすかったかもしれないが、さすがに辛い。

だからバツサリ切った。以前と同じとまでは行かなかったが、校則に引つかからない程度だった髪に近い長さだった。

そう、切った筈だった。

翌日の朝。つまり今現在。

腕に髪の毛が当たった。俺は急いで自室になった寮の管理員室の洗面所へ向かい、鏡を見た。

そこには、長髪に戻った俺の姿が写っていた。

「マジですか!?!」

髪の毛を引つ掴んで叫んだ。朝だなんて事は気にしない。

そんな事より何で元に戻ったのかを考えなければならぬ。普通に怪現象だ。俺は呪われた人形じゃないぞ。

「そつだ、文章書くなら文章書き。小説書くなら小説書き。ふざけた幻想の事はふざけた奴に聞こう!」

テンパってなにか訳の分からない事を言った気がするが、それはさておき。

昨日この部屋に着いた時からあった携帯を引つ掴む。俺のじゃない携帯を見つけた時は不思議に思ったが、これは口リで奇妙なアンチクシヨウ限定で通話できる携帯だった。曰く、何か分からない事があつたら掛けてきて下さい。気が向いたらとりますから、だってさ。

とにかく俺は通話ボタンを押した。この問題を解決できる人物で今会話できる心当たりは生憎と一人しかいなかった。

ぽびぽびぽび。ぽっぴっぴー。……トウルルルル。シジミがトウルルルル。プツン。

「切れた!？」

はいもしもし。こちらロリで奇妙な神様ですよ

「と思つたら繋がってるし! っていうか突っ込みどころが多すぎるだろ!」

どこから突っ込んでいいのか分からないので、もういつその事放つておいた。今はそれどころじゃない。

「朝なんて起こった事をありのままに話すぞ。昨日、俺は散髪をした。そりやもう見事にバツサリいった。それなのに今日の朝、俺の髪の毛は元の長さに戻っていた。何を言っているのか分からないかもしれないが、俺にもよく分からない。この現状においてなにか仮説を立ててみてくれ」

あ、それは多分夜の間治癒能力が発動しているだけだと思いますよ

「治癒能力?」

なんだそりや。そんな能力に目覚めていたなんて初耳だぞ。もしそれが本当なら医者いらすじじゃないか。これも天使の能力か?

そうですね。天使にはある程度の高速自然治癒能力が備わっています。中程度の怪我なら翌日に、重症であつても3日後には治つてますよ。腕の一本持つていかれても5日後には生えてます

「凄っ! っていうか髪の毛にまで発動しなくてもいいでしょう!」

きっと昨日の夜は俺の髪の毛が徐々に徐々に伸びていったんだろ
うな。ホラー過ぎる。

ちなみにその能力、結構疲れるので気を付けてくださいな

「そうなのか? 別段体に異常はないんだが」

まあその内疲れてくるでしょう。結構キマますよ。そりやもう新世紀にイける程に

「俺は薬中か」

まあそんな事はあなたがその世界にやってきた理由ぐらいどうでもいいんですよ。私にとつては

.....
あなたまでその理由でさめざめと泣きますか。まったく昨今の男
と言つものは.....。嘆かわしいですねまったく

五月蠅い。こちらら人生においてもっとも輝かしい数ページである青春と言つ名の思い出を作る事すら出来ずにやってきたんだ。皆はきつと楽しんでるだろうに、何でおれは17歳にして既に就職してるんだ。そう考えたら無性に泣けてくるんだよ。悪いかつ。後「まったく」を二回言ってるぞ神様よ。

さて、そろそろ切つていいですか？ 私にも都合と言つものがありません。主に暇つぶしとか暇つぶしとか暇つぶしとか

「暇じゃねえかよ！ 暇を潰す事に熱心になれるほどに！」
と言つ訳で切りますね

「都合が悪くなつたらスルーかこの野郎！ 別にいいけどさ、もう質問は終わったからさあ！」

あ、それと、今日のあなたの運勢をとつても不幸にしておきましたのであしからず。では〜

「なんでだああああ！！！」

その後無情にも、神様は通話を何の躊躇もなく切った。

「成程、アイツの仕業ならどうしようもないな」

「そんな殺生な事をさらつと言わないで下さいよ.....」

職員室でのひと時の会話。横にはディオ様。いやもついつそD I O様。

今日は朝から軽い不幸続きで参っている。

具体例を挙げると、寮から学校に行く途中で生徒からの質問攻めにされて、最悪なタイムングで疲労が押し寄せた。生徒達に気取られないように会話をして着いた職員室の自分の席に倒れこんだ拍子に舌を噛んで口の端から血を流す。夜寝てる間にしか発動しない高速自然治癒能力は期待できず、しかも少し深く切ったのが、血は止まらないわチクチクして気が逸れるはで朝から辛かった。体がだるかったので放っておいたら、通りすがりの先生にもの凄く心配されて大事になった。傍から見たら、多少死んだ眼で口から血を流してデスクに突っ伏していた姿はまさに死にかけている人みたいだったらしい。

しかし突っ伏している訳にもいかず、しんどい体に鞭打って休み時間には学校を見回ったり、昼休みには生徒の話を聞いたりしていた。それでもしんどいのにも何もない所で躓いたり、その拍子に壁に頭ぶついたりと散々な目に逢っている。

その上医務室で休憩を取っていたら、3-Aの佐々木まき絵と言う女生徒が運び込まれたり、それを聞きつけて3-Aの生徒全員がやってきたり、果てはネギ先生までやってきた。静かだった医務室が途端に騒がしくなったのは言うまでもない。医務室の養護教諭は3-Aは特に騒がしいクラスだから、と教えてくれた。恐らくあの人のフオローだったと思う。あの養護教諭の先生とは仲良くやっている。昨日今日でそれなりに話をする仲になれたのは向こうの配慮もあるだろう。女性だったので俺はヨーク先生と呼んでいる。名前は違うが、俺がそう呼んでいるだけだ。ちなみに由来は養護から取ってきた。

さて、閑話休題。

兎にも角にもそういつた誰のせいでもない、誰のせいにも出来ない不幸が続き体もしんどいので、職員室では横の席であるディオ先生に相談をしていた。

やはりというか、ディオ先生も神様の事を知っていた。結構なパーセンテージで振り回されているらしい。

「取り敢えず、めげない事だな。何も出来ないが、話し相手ぐらいにはなつてやろう。その内酒でもひっかけに行くか」

「私は一応未成年なんですけど」

「社会的には大人の身分だ。問題ない」

「ないのか？ そもそもそういう問題なのか？」

まあいいや。話し相手が出来たのは素直に嬉しいし。チューハイぐらいなら飲めるし。

「しかし吸血鬼騒動か。それもウチのクラスの佐々木が巻き込まれた、か」

「ええ。何でも桜通りで倒れているところを見つけて、この学校に運び込まれたそうです。クラスの生徒は、涼んでいた時に気を失ったと言っています」

「そんな話は聞いた事がない。」

涼んでいる内に気絶なんてなにかあるに決まっている。しかし佐々木まき絵には持病はないとヨーコ先生は言っていた。

そんな何もない一生徒が倒れていて、しかもそこは吸血鬼の出て噂されていた桜通り。

「だから佐々木まき絵は吸血鬼に襲われたと言われている。」

「ふむ、まあ心当たりもある事だ。調べてみるか。副担任でもあるしな」

「そうなんですか？」

確か3-Aはかの子供先生であるネギ先生が担任をしているクラスだ。さつき医務室まで来たのもそのせいだろう。

ネギ先生が担任、ディオ先生が副担任。おまけにクラスは騒がしい事で有名か。こう考えるだけでも話題性に富んだクラスだな。生

徒も一癖二癖あるんだろっな。その内見に行ってみよう。

「ああ。中々に面白いクラスだぞ。Aは。少なくとも暇はしない」
「ははは……、そうですね」

若干苦笑いを浮かべる。

暇するどころか、きつと暴走を止めるのに労力を使っただろっな。しかしこのデイト先生を副担任にしても騒がしいとは、中々に大物な生徒たちだな。

「さて、そろそろ先にお暇させてもらおうとするか」

「はい。話を聞いてもらって、ありがとございました」

「礼には及ばん。また今度にも、あの神様への愚痴を肴に一杯いこうじゃないか」

「はい、それでは」

デイト先生はクールに去っていった。

そんなこんなで不幸な一日も終わりに近づいて時計の針は進んでいき、綺麗な満月が爛々と輝き満ちている空を眺めていた。片手に梅酒を持って。

「ん？ なんだあれ」

梅酒で月見酒と洒落込んでいた俺の視界に、なにか黒いものが空に浮かんでいるのが見えた。

「コウモリの群れ？ こころ辺はコウモリが出るのか。流石埼玉県。県が変わると色んな物が見えるな」

コウモリは群れをなして飛んでいた。少し横に見える校舎の屋上より上だから、8階以上の高さを飛んでいる事になる。

コウモリはそう高く飛ぶイメージが無かったので少し驚いた。羽で飛ぶ生き物は凄いなあ。

「 そうだ。飛行練習全然やってなかった。まあいいか、明日でまだここにきて3日目が終わるってところだし、焦る必要はないだろう。今は月見酒の続きと洒落込んでおこう。」

その後、梅酒の缶を2、3本空けて俺は床に就いた。

父さん母さん。

若干腹立たしい嫌がらせはありましたが、息子は元気です。話し相手も増え、先の人生に光が見え始めました。

第4話「悪のカリスマ? D I O様登場」(後書き)

こんにちは。赤原です。

今回はあまり言う事は無かったりします。と、言う訳で手短に終わらせますよう。

何か書いてる内にももの凄いフレンドリーなったD I O様。そして神様の思惑に知らず知らずに巻き込まれていく主人公。神様は微笑ましく二人を見守っているでしょう。

今回は書いてとても楽しかったです。なにか久しぶりに即決納得出来るコメディ話を書けた様な気がする。最近コメディをよく読んでいたからかな。恐るべし、リトルバスターズ。

さて、実は今は火曜日の朝7時15分。しかもテスト日。+高校三年生。何しているんでしょね私は。遅刻したら笑い話にしかないのです、今日はこちら辺で区切ります。

それではまた次回も、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8381q/>

魔法先生ネギま！ ～天使で死神な物語～

2011年5月24日13時54分発行